原　著

未就学児を育児中のシングルマザーが抱く思い

Thoughts of Single Mothers with Pre-School Children

佐々木　美果，小林　康江
SASAKI Mika, KOBAYASHI Yasue

要　旨

本研究の目的は，未就学児を育児中のシングルマザーが抱く思いを明らかにすることである。1人以上の未就学児を育児中のシングルマザー27名を対象に，育児ストレス尺度を用いた構成的面接，かつ育児に伴うストレスや日常生活における不安や心配事，子どもへの思いについての半構成的面接を行い，質的帰納的に分析を行った。その結果，未就学児を育児中のシングルマザーの抱く思いは，【ひとりで全てを背負い生きていくことに孤独を感じる】【経済的基盤が確立しないことから生じる不安と辛さがある】【周囲や子どもに支えられ前向きになる】の3つのカテゴリーから構成されていた。未就学児を育児中のシングルマザーは，否定的な思いと肯定的な思いというアンビバレントな思いを抱いており，この思いは周囲からの評価や支援の状況が影響していることが考えられた。

This study aimed to clarify the thoughts of single mothers with pre-school children. Structured interviews using Child Care Stress Scale and Semi-structured interviews were conducted with 27 single mothers with at least one pre-school child to examine stress from child care, worries and anxiety in daily life, and thoughts toward their children. The collected data were qualitatively inductive analyzed. The analysis revealed that the thoughts of single mothers with pre-school children were composed of three categories: “feeling lonely having to live and take everything on oneself,” “anxiety and distress due to the lack of a stable economic foundation,” and “positive attitudes acquired through support from one’s children and surroundings.” We conclude that single mothers with pre-school children hold ambivalent positive and negative thoughts, which are swayed by how they are evaluated and supported by their surroundings.

キーワード　シングルマザー，未就学児，育児
Key Words　Single Mother, Pre-School Children, Childcare

Ⅰ．序論

近年，子どもをもつ夫婦の離婚が増加している[1)]。現代においては自分らしく生きることが望ましいという価値観が広がっており，結婚生活においても夫婦それぞれの価値観に対する両立が困難な状況が生じる結果[2)]，離婚に至るという背景があると考えられる。

ひとり親家庭においては約85%が母子世帯であり，未婚の母の割合も増加している。また，ひとり親になった時の末子の年齢は4.4歳と年々低下傾向にある[1)]。さらにシングルマザーの就業率は約8割と高いものの就労収入は約200万円であり，児童のいる世帯収入の約38%と低く，相対的貧困率も50.8%と高い水準となっていることから[1)3)]，未就学児をもつシングルマザーは，両親世帯の母親とは異なる環境で育児をしている現状がある。

乳幼児を育児中の母親は高不安状態であることや，子どもの年齢が高くなるとともに子育ての負担感やイライラ感が増大すること，4～6歳児をもつ母親においては，精神的に不健康状態になること[4)～6)]が報告されている。しかし，母親は夫や祖父母をはじめとする複数の相談相手や支援者がいることで育児を前向きにとらえることができ，育児不安や育児負担感は低くなることが明らかにされている[7)8)]。一方，シングルマザーの場合は両親家

受理日：2019年7月30日
山梨大学大学院総合研究部医学域看護学系（母性看護・助産学領域）：University of Yamanashi, Graduate School of Interdisciplinary Reserch, Faculty of Medicine, Division of Nursing Science

庭の母親と比較し家事や育児に費やす時間が長いため，社会活動への参加が鈍ることで社会的連帯の輪からはずれやすく，育児ストレスも両親家庭の母親より高いことが報告されている[9)～11)]。このような背景があることから，シングルマザーの育児に対する思いは両親家庭の母親とは異なると考えられるが，それらを明らかにした研究は少ない。未就学児を育児中のシングルマザーが抱える思いを明らかにすることは，シングルマザーを理解する上で必要であり，両親家庭とは異なる側面をもつシングルマザーへの育児支援を検討していくためには重要であると考える。そこで，未就学児を育児中のシングルマザーが日常生活で抱いている思いを明らかにすることを目的とし，本研究を行った。

Ⅱ．研究方法

1.　研究デザイン

育児ストレス尺度[12)]を用いた構成的面接法，かつ尺度の項目に対しては半構成的面接法を用いた質的研究を行った。

2.　用語の定義

未就学児を育児中のシングルマザー：1人以上の0～6歳の未就学児を養育しており，配偶者と離別または未婚で出産した母親。

3.　研究参加者および調査期間

A県内6市における，1人以上の未就学児を育児中のシングルマザーを対象とし，先行研究[11)]で回答が得られ，かつインタビューの同意が得られた27名を対象とした。調査期間は平成27年11月～平成28年3月であった。

4.　データ収集方法

先行研究[11)]で同意が得られた参加者に，本研究の調査の研究の目的や方法，倫理的配慮に関する内容を記した依頼文を送り，同意の返信が得られた参加者に対して，具体的な日程調整の電話を入れた。面接を行う日時，場所は参加者の希望に沿い，面接場所は他者の出入りがない個室としプライバシーの確保をした。

面接は，清水により作成された育児ストレス尺度[12)]の29項目（表1）を用いて構成的面接を行った。この尺度は9因子33項目から構成されているが，今回はシングルマザーを対象としたため，尺度の作成者に変更の承諾を得た上で，「夫の育児サポート」の因子を除外した8因子29項目を用いた。各項目に対し，あてはまる～あてはまらないの5段階評価のどの位置であるかを確認した。その後さらにその回答に対してなぜそのように思うのかの事情を詳細に語ってもらった。また現在の不安や心配事，子どもに対する思い等も自由に語ってもらった。なおインタビューは研究参加者の同意を得て，ICレコーダーに録音した。

5.　分析方法

データは逐語録化し，シングルマザーとして育児をすることに対する思いの語りを抜粋した。次にデータを繰り返し読み，そのデータの示す意味を解釈し，内容の意

表1　育児ストレス尺度

1．育児のことを考えると，漠然とした不安を覚える。	15. ダダをこねられて困ってしまうことが多い。
2．子どもの性格に気がかりがある。	16. 子どもの機嫌が悪くなると困ってしまう。
3．子どもにどう接していいかわからない。	17. 暴れて動き回ったり，いたずらされると困ってしまう。
4．子どもがあまりにも思いどおりにならない。	18. 子育てから解放されて息抜きできる時間が少なすぎる。
5．育児について期待していたことと現実との間にギャップを感じてしまうことが多い。	19. 子どもの世話で自分のやりたいことができない。
6．子どもの顔つきや容姿容貌に気がかりがある。	20. 子どもの世話で自分の自由がきかないのがとても辛い。
7．同じ年頃の子どもの様子を知って我が子が劣っているのではと不安に思う。	21. 子育ての毎日同じことの繰り返しに嫌気がさしている。
8．子育てしながらでは就職できるところがないので困っている。	22. 完全な子育てをすべきだという周囲からのプレッシャーをきつく感じる。
9．いつか子育てに余裕ができるころに就職できるかが不安だ。	23. 子育てに関する昔ながらの地域や家の習慣を押しつけてくる。
10. 子育てに専念しているために社会から取り残された気持ちになる。	24. 祖父母の忠告によって子育てに対する迷いが生ずることがある。
11. 周囲の人に子どもの母親としてしか見てもらえないのが辛い。	25. 子どもの知的能力に気がかりがある。
12. 育児のために睡眠不足の日々が続いている。	26. 子どもの言語能力に気がかりがある。
13. 夜間，育児のために何度も起きなければならなくて困っている。	27. 不可解な事件や犯罪に，子どもが巻き込まれるか心配である。
14. 育児で体の疲れが溜まっている。	28. 就労している母親に対する社会や行政の配慮が足りない。
	29. 教育環境が不備なので子どもの行く末に不安をもつ。

出典：清水(2001)[12)]より一部改変．

味に沿ってコード化した。その中から同様の意味や内容を示すコードを分類し，これをサブカテゴリーとした。さらにサブカテゴリーを集約し，類似性をもってカテゴリーとした。カテゴリーにデータが一致するかデータの妥当性を再確認し，一致したものを最終のカテゴリーとした。分析には，母性看護を専門とする研究者１名からのスーパーバイズを受け，結果の妥当性の確保に努めた。

6. 倫理的配慮

研究参加者に対して，本研究の目的や内容，倫理的配慮について説明し同意を得た。倫理的配慮としては，研究への協力は自由意志によること，インタビューを途中で中断することは可能であること，データは研究目的以外には一切使用しないこと，データの匿名性の保持を約束すること，結果は公表する可能性があることについて説明した。本研究は長野県看護大学の倫理委員会（承認番号 2015-5）の承認を得て実施した。

Ⅲ．結果

1. 研究参加者の背景

研究参加者の概要を表２に示す。子どもの人数は１人，２人が共に 12 人と最も多く（平均 1.7±0.7 人），末子の年齢は２歳が 10 名と最も多かった（平均 3.4±1.4 歳）。データ収集時間は平均 104.3 分（範囲 57 ～ 197 分）であった。

2. 未就学児を育児中のシングルマザーが抱く思い

未就学児を育児中のシングルマザーが抱く思いは分析の結果，27 のコード，10 のサブカテゴリーに分類され，【ひとりで全てを背負い生きていくことに孤独を感じる】【経済的基盤が確立しないことから生じる不安と辛さがある】【周囲や子どもに支えられ前向きになる】の３つのカテゴリーが生成された（表3）。以下【　】はカテゴリー，《　》はサブカテゴリーを示す。

1）【ひとりで全てを背負い生きていくことに孤独を感じる】

これは６つのサブカテゴリーで構成されており，シングルマザーが周囲から理解されないうえに自らの思いを発することができない状況におかれていることで，ひとりで育児をはじめとする全てのことを背負わなくてはならないと感じ，孤独が生じているという思いである。シングルマザーは，《子どもに対する罪悪感》や《子どもから生じる負の感情》などの育児に対するマイナスな感情を抱えるも，自らシングルマザーを選択したことから思いを表出することを躊躇し，さらに本音を伝える相手がいないことや，思いを周囲に伝えても理解されない体験から，《自分の思いを受け止めてくれる相手がいない寂しさ》となり，シングルマザーである劣等感やレッテルをはられることで，《自分は周囲の母親とは違うという思いから生じる劣等感》を感じていた。さらに周囲からの支援がないなかで育児をしていくことにより《支えがない中で生きていく辛さ》や，過去にドメスティック・バイオレンス（以下 DV）があった体験から《現在も継続する DV の影響に耐える》思いを抱いていた。

2）【経済的基盤が確立しないことから生じる不安と辛さがある】

これは２つのサブカテゴリーから構成されている。シングルマザーは経済的基盤が確立できないことによる育児や生活に対する不安があり，母子ともに必要な受診行動もとれないことから，子どもに対して負担をかけているという辛さを抱くことで生じる思いである。シングル

表２　研究参加者の概要

（N=27）

母親の年齢	25 ～ 44 歳（平均 32.1±5.7 歳）	
シングルマザーとなってからの経過年数	6 カ月～ 9 年（平均 2.9±2.1 年）	
シングルマザーとなった理由	離婚	20 名
	（このうち離婚原因が DV であったもの 9 名）	
	未婚	7 名
家族形態	核家族	12 名
	複合家族	15 名
就業状況	有職	27 名
	正規雇用	13 名
	非正規雇用	14 名
年収	100 万円未満	7 名
	100 ～ 300 万円未満	20 名
児童扶養手当の受給	あり	24 名
	なし	3 名
生活保護の受給	あり	1 名
	なし	26 名

DV：ドメスティック・バイオレンス

表３　未就学児を育児中のシングルマザーが抱く思い

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
ひとりで全てを背負い生きていくことに孤独を感じる	支えがない中で生きていく辛さ	ひとりで育児及び生活全般の全てをこなす辛さ
		経済的支援の受給に制限があるため制度が利用できず，心身ともに疲弊する
		両親から育児を叱責される辛さ
	自分の思いを受け止めてくれる相手がいない寂しさ	シングルを選択したという責任から，辛い思いを表出することを躊躇する
		自分の本音を表出する相手がいないことでのさみしさ
		自分の気持ちを伝えても理解してもらえない辛さ
	子どもに対する罪悪感	子どもから父親を奪ってしまった罪悪感
		時間に追われ子どもと向き合えていない罪悪感
	子どもから生じる負の感情	子どもへの怒りをコントロールできず感情を爆発させる
		子どもと一緒にいることを苦痛に感じる
	自分は周囲の母親とは違うという思いから生じる劣等感	自分は他人とは異なっているという劣等感
		常にシングルマザーというレッテルでみられるしがらみ
	現在も継続するDVの影響に耐える	継続する元夫への恐怖心
		DVの影響による子どもの成長への不安
		DVの体験から他人を頼ることができない
経済的基盤が確立しないことから生じる不安と辛さがある	経済基盤が不安定であることから生じる不安	経済的自立ができないため子どもの可能性を制限してしまうみじめさ
		正規雇用でないことから生じる将来の生活に対する不安
		想像以上に経済的困難な状況におかれていることから生じる不安
		経済的自立ができないことに対して子どもに気をつかわせる情けなさ
		保障されない養育費の支払いによる将来の不安
	経済的困難な状況のため受診行動を制限しなければならない辛さ	経済的および時間的負担が大きいために受診をしない
		金銭的負担から子どもを受診させられない不甲斐なさ
周囲や子どもに支えられ前向きになる	自分を理解してくれる周囲の存在	就業先の人々がシングルマザーであることを理解しサポートしてくれる
		他人から認めてもらうことで心が安定する
		気持ちを共有できる同じ境遇の仲間がいる安心感
	子どもが生きる原動力となる	子どもが自分を必要としてくれる喜び
		子どもの存在があることで頑張れる

マザーは，シングルマザーとなる前に想像していた状況よりも経済的に困難な現実に直面しており，雇用形態や養育費が保障されない不安や，生活のなかで子どもに負担をかけている辛さから，《経済基盤が不安定であることから生じる不安》という思いを抱えていた。さらに経済的および時間的負担があることから健康上の問題が生じても受診せず，子どもに対しても必要時に受診をさせられない不甲斐なさから，《経済的困難な状況のため受診行動を制限しなければならない辛さ》という思いを感じていた。

3）【周囲や子どもに支えられ前向きになる】

これは２つのサブカテゴリーから構成されている。今回の面接においては，育児ストレス尺度の各項目の評価をしてもらいながらその評価にまつわる事情を確認したが，質問の中で育児ストレスはないという回答の項目もあった。このカテゴリーはそれらの回答から抽出されたものである。

シングルマザーは自分が周囲に理解され認められていると感じることから，前向きな思いが生じていた。このような思いはシングルマザーである自分を理解してくれる周囲の存在や，他人から認められていると感じる体験から心が安定し，気持ちを共有する仲間がいることで，《自分を理解してくれる周囲の存在》という思いになっていた。子どもの存在や子どもが自らを必要としてくれることで喜びを感じ，それらが生き甲斐となることによって《子どもが生きる原動力となる》という肯定的な思いを抱いていた。

Ⅳ．考察

シングルマザーは周囲との人間関係が希薄で，全てをひとりで抱え生きていかなければいけないことから生じる孤独感や，経済的基盤が不安定であることから生じる不安や辛さという否定的な思いを抱えていた。一方で，周囲との人間関係のなかで自分が肯定されていると感じることにより，前向な思いを感じていた。これらのことから未就学児を育児中のシングルマザーは，肯定的な思いと否定的な思いというアンビバレントな感情をもちながら育児をしていることが明らかとなった。そしてこのアンビバレントな思いは，シングルマザーが周囲との関係や支援をどのようにとらえるかにより変化していると考えられる。

シングルマザーの否定的な思いとして，【ひとりで全てを背負い生きていくことに孤独を感じる】思いと，【経済的基盤が確立しないことから生じる不安と辛さがある】思いがあった。シングルマザーは自分の意見に賛成して

くれる身内からの評価的サポートが重要であり[13)14)]，支援がないことや年収300万円未満であることは育児ストレスを高める背景であること[11)]が報告されている。そのため社会からも家族内からも認められず支援がないと感じることは，孤独や不安の要因となる可能性がある。さらにシングルマザーは，自らがシングルマザーという選択をした責任から，否定的な思いを他人へ表出することを控えていた。これはシングルマザーになるという自己決定をしたことで，ひとりで全責任を背負って生きていかなければならないと感じていることから生じていると考える。また乳幼児の母親は，周囲の人間関係や夫との関係が良好であるほど，個としての自分や母親としての自分の両者を受容することでアインデンティティを統合させ[15)16)]，親である自分や生活に満足することにより自分を価値あるものと評価する[17)]と報告されている。しかし，シングルマザーはマイノリティーな存在である上に，周囲から負のレッテルをはられることで劣等感を抱き，他人から受け入れられず認められないと感じることにより，自己肯定感が低くなっている可能性がある。さらに母親の健康度は母親の自己肯定感につながること[18)]が報告されているが，シングルマザーは経済的問題から医療機関への適切な受診行動がとれていなかった。このように健康に対しての意識が希薄となり健康度が低下することも，シングルマザーの自己肯定感が低くなることに影響している可能性がある。シングルマザーが自己肯定感をもち育児をすることができるためには，シングルマザーが自らの思いや辛さを表出することのできる環境や，適切な医療につながることができることが重要であるといえるため，今後はこれらの支援体制の構築が必要だといえる。

また今回の対象者の中には，シングルマザーとなった原因がDVであった母親がいた。DV被害女性は，大切にされる自分の存在を知覚し，他者への信頼を取り戻すことが回復につながるが[19)]，今回の参加者は現在もDVに対し怯えている状況であった。これは現在も自分を含め周囲を信頼できない思いが継続していると考えられる。そのためDV被害者のシングルマザーは，他の原因でシングルマザーとなった母親より，さらに孤独を感じている可能性がある。シングルマザーの就労形態や年収等の背景を把握することが有効な支援を考える上で必要であるが[11)]，シングルマザーとなった経緯を把握することも，シングルマザーの支援を考えていく上で必要であるといえる。

このような否定的な感情がある一方で，シングルマザーは，【周囲や子どもに支えられ前向きになる】という肯定的な思いも抱いていた。母親の肯定的な感情は仲間の存在や他者との関係が良好であると認知することにより生じ，子どもの存在を意識することは愛情ややりがいになる[7)20)21)]。このことから，シングルマザーは周囲から理解され子どもから必要とされることにより自分が認められていると感じ，さらに気持ちを表出できる仲間の存在があることが，前向きに生きる思いとなっているといえる。また，今回のシングルマザーは全員が就業していた。就業率の高いシングルマザーは，両親家庭の母親以上に仕事仲間からのサポートを認知している[14)]との報告があるが，これは就業先での人間関係しか構築されておらず，就業場所が唯一自分を理解してもらえると感じる場となっている可能性が考えられる。さらにシングルマザーは《子どもが生きる原動力》となっていた。乳幼児をもつ母親にとっての子どもの反応は，母親としての自信に影響することから[22)]，シングルマザーは子どものポジティブな反応をとらえることが，生きる原動力となっていると考える。しかし一方で，シングルマザーは子どもと親密な関係を築いていること[23)]，母親が大人の人的サポートを持たずに孤立した場合は，年長の子どもを情緒的なサポートにしてしまうことがある[24)]と報告されている。そのため，シングルマザーは子どもから必要とされることで幸福感を得ている一方，子どもが自分を認めてくれるという自己肯定感を得るための手段になっている可能性がある。またシングルマザーの育児ストレス因子は，「育児環境の不備」に次いで，「子どもに対するコントロール不可能感」が高かったことが報告されている[11)]。これは子どもが自分の思い通りに行動してくれないことから生じる思いであるが，子どもと依存関係にあるシングルマザーの場合，子どもが思い通りにならないことで自分が認められないと感じ，怒りにつながる可能性が考えられる。シングルマザーと子どもの関係は濃密で親密である一方で，非常に脆弱性が高い関係であると考えられることから，看護職は母子の関係性をアセスメントしながら見守るとともに，他の専門職と連携し母子を包括的に支援していくことが必要である。

Ⅴ．結論

未就学児を育児中のシングルマザーが抱く思いは，【ひとりで全てを背負い生きていくことに孤独を感じる】【経済的基盤が確立しないことから生じる不安と辛さがある】【周囲や子どもに支えられ前向きになる】の3つのカテゴリーから構成されていた。未就学児を育児中のシングルマザーは否定的な思いと肯定的な思いというアンビバレントな思いを抱いており，この思いは周囲からの評価や支援の状況が影響していることが考えられる。

Ⅵ．研究の限界と今後への課題

本研究はA県のみを対象として行ったが，地域性や自治体によるシングルマザーの支援体制は異なっている。

そのため今後は対象とする地域を拡大しながら検討を進めていく必要がある。

謝辞

本研究にご協力いただいたお母様方，ならびに施設の皆様に心より感謝いたします。

本研究はJSPS科研費15 K 20738の助成を受けて実施した。

なお，本論文内容に関連する利益相反事項はない。

引用文献

1) 厚生労働省，平成28年度全国ひとり親世帯等調査結果報告(2016) https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000188147.html(2019年4月28日現在)
2) 神原文子(2011)現代における夫婦関係の特徴　生成と解体．子づれシングル ひとり親家族の自立と社会的支援．明石書店，東京，50-52.
3) 厚生労働省，平成28年国民生活基礎調査の概況(2016) https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa16/index.html(2019年6月30日現在)
4) 松岡治子，行田智子，今関智子，他(2002)妊娠期・産褥期・育児期の母親の不安について　日本版STAIを用いた横断的研究．母性衛生，43(1)：13-17.
5) 原田正文(2006)現代母親の精神的ストレスとその新たな原因．子育ての変貌と次世代育児支援－兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防．名古屋大学出版会，愛知，210-213.
6) 山本直子，永橋美幸，大石和代(2017)乳幼児を持つ母親の精神的健康と医学的社会的特徴－4か月児を持つ母親と4～6歳児を持つ母親の比較－．母性衛生，58(1)：100-107.
7) 足達淑子，温泉美雪，曳野晃子，他(2000)1歳6か月児の母親の養育行動－質問票調査からみた具体的行動，育児ストレス，認知の関係について－．行動療法研究，26(2)：69-82.
8) 山﨑さやか，篠原亮次，秋山有佳，他(2018)乳幼児を持つ母親の育児不安と日常の育児相談相手との関連：健やか親子21最終評価の全国調査より．日本公衆衛生雑誌，65(7)：334-346.
9) 総務省統計局，平成28年社会生活基本調査(2016) https://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/kekka.html(2019年4月28日現在)
10) 吉田恭爾(1979)概説　母子家庭の問題と母子福祉施策．現在のエスプリ，142：5-20.
11) 佐々木美果，清水嘉子，塩澤綾乃，他(2018)未就学児をもつシングルマザーの背景による育児ストレスと蓄積疲労. 母性衛生，59(2)：416-423.
12) 清水嘉子(2001)育児環境の認知に焦点をあてた育児ストレス尺度の妥当性に関する研究．ストレス科学，日本ストレス学会誌，16(3)：176-186.
13) 荒牧美佐子(2005)育児への否定的・肯定的感情とソーシャルサポートとの関連　ひとり親・ふたり親の比較から．小児保健研究，64(6)：737-744.
14) 平谷優子，法橋尚宏(2014)子育て期のひとり親家族の家族機能と認知的ソーシャルサポート．家族看護研究，20(1)：38-47.
15) 黒澤礼子，田上不二夫(2005)母親の虐待的育児態度に影響する要因の検討．カウンセリング研究，38(2)：89-97.
16) 岡本祐子(1996)育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究．日本家政学会誌，47(9)：849-860.
17) 及川裕子，久保恭子(2013)乳幼児を持つ母親の精神健康状態と生活満足度．園田学園女子大学論文集，47：85-93.
18) 鈴木美佐，古株ひろみ(2015)4歳から6歳の幼児をもつ母親の育児負担感と自己効力感，ソーシャルサポートの関連．聖泉看護学研究，4：11-20.
19) 藤田景子(2013)ドメスティック・バイオレンス被害女性の回復を促す周産期の助産ケア．日本助産学会誌，27(2)：247-256.
20) 清水嘉子，伊勢カンナ(2006)母親の育児幸福感と育児事情の実態．母性衛生，47(2)：344-351.
21) 清水嘉子，佐々木美果，小川紀子，他(2015)「母親の心の健康チェックシート」を用いた訪問による育児相談における母親の語り．母性衛生，56(1)：146-153.
22) 武田江里子，小林康江，加藤千晶(2012)母親の子どもに対する「愛着－養育バランス」尺度の開発 第1報－母親から子どもへの「愛着」「養育」の構成因子の抽出．日本看護科学会誌，32(1)：30-39.
23) 門間晶子，浅野みどり，野村直樹(2010)日本のシングルマザーの子育てにおける語りと社会的現実．日本看護医療学会雑誌，12(2)：1-13.
24) Barbara Sachs, Mary Pietrukowicz, Lynne A. Hall(1997) Parenting attitudes and behaviors of low-income single mothers with young children. Journal of Pediatric Nursing, 12(2)：67-73.